



特定非営利活動法人 海苔のふるさと会 会報

大森 海苔のふるさと館 ニュース 22号

企画展 大田の船模型展 —海苔船の誕生—

船模型で紹介する海苔船の成立 海苔船は荷足船と打瀬船から生まれた

平成23年6月21日(火)～10月16日(日)

この度、企画展『大田の船模型展 —海苔船の誕生—』で紹介致します船模型は「大田区立郷土博物館」の収蔵品と「大森海苔のふるさと館」の常設展示ならびに収蔵品、合わせて7点の船模型を2階展示室で紹介しています。

「海苔船」は、海苔漁場の拡大に伴い、より遠くにある沖合いの漁場に向かうため、海苔採りで使われていたベカ舟数隻と動力(エンジン)を積載した船のことです。

また、はじめから「海苔船」という動力船そのものが存在したのではなく、往時、東京湾内や多摩川河口付近で使われていた大型帆船である「荷足船(にたりぶね)」や「打瀬船(うたせぶね)」といった大型の中古船を流用し改良されたものが、「海苔船」として誕生しました。

「大森海苔のふるさと館」の1階展示室には、特に初めて当館に足を運ばれる方には強いインパクトを与える展示品があります。それが今回、企画展の「海苔船」模型のモデルとなった実際の「海苔船・伊藤丸」です。全長は13メートルにもなり、往時、実際に使われていた実物の船です。みなさんはその迫力に圧倒されるはずです。

さらに「海苔船・伊藤丸」の上には実際に使われ



ていた1艘のベカ舟とその手前には平成8年に復元された中ベカ(ちゅうべか)も展示されています。

現在、「大森海苔のふるさと館」の目の前に広がる「大森ふるさとの浜辺公園(略称:ふるはま)」の海上には、往時、数多くの木造船が行き来し、海苔採り作業には決して欠かすことのできない船だったからです。

今回の企画展では「海苔船」の成立や時代背景などを写真パネルやキャプションなどにまとめ、限りなく忠実に復元された船模型を使い立体的な展示を行っています。

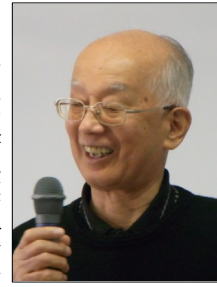
元船大工の方や元海苔漁業者の方のご協力の元、船模型の展示を行なうことができました。さらに前回の『ニュース21号』でもご紹介致しました小島延喜氏よりご寄贈頂いた「荷足船」も展示させていただき、さらに迫力ある展示となりました。

少しでも多くの方々に「海苔船」について興味を持って頂けるよう展示方法も工夫し、わかりやすく楽しんで「海苔船」の歴史を学んでいただける貴重な機会を持ちました。

是非、この夏休みの機会にも多くの方々にご来館いただき、往時の海苔漁業について少しでも考えていただけるきっかけになればと思います。(高橋)



大森の 海苔生産 の思い出



そろそろ丸

長谷川雅男 (仲川三部)

当館の催し物では、元海苔生産者の方々にご指導、ご協力を戴いています。今回、その中のお一人、長谷川雅男氏より、当時の思い出を書きとめた小冊子をお借りしました。その一部を掲載させていただきます。

ある。大森漁業組合で海苔製造をしていた仲間の中で船足が一番遅い船だったので、父と私は、ふたりで自分の船を、そろそろ走る「そろそろ丸」と呼んでいた。

東京湾の沿岸漁業とはいえ、海苔の最盛期である冬の海は北西の季節風が強く吹き荒れる。全長八メートル、幅二メートルそこそこの船体に五馬力のエンジンを搭載した老朽船。何故、そのような老朽船で、ひとつ間違えれば生命にかかわる、荒れる冬の海に出て行ったか。

当時、昭和三十五年前後の東京湾の沿岸漁業は大きな転換期を迎えていた。東京オリンピック開催のため、羽田空港への湾岸道路整備、その上、工業の発展による沿岸の海水汚染で廃業寸前であった。というのも汚染がもとで、年毎に不作が大きくなり、借金がかさむばかりだったのである。そんなわけで、古い船を手入れし、エンジンを整備して大事に使わざるを得なかった。

冬の海での操業は東京湾とはいえず大変なものだった。ひとつ荒れだすと二メートル以上の波が立ち、私の船のような小さい船は木の葉のように弄ばれてしまう。そこで、私達海で働く者は天気予報、特に風向きに注意し少し雲行きが悪くなると、すぐ操業を中止して岸に向かって逃げるのである。

まず、海苔を採る一人乗りのテンマ船を親船に引き上げる、そして、船の揺れにより動かないように、しっかりと固定してから走り出す。船で怖い



テンマ舟(ベカブネ)で海苔と
昭和38年1月 田中守男氏撮影
大田区立郷土博物館蔵

は、荷崩れと、波が船の中に飛び込み船底に溜まり、船のバランスを崩すことである。そこで、常に海水をかい出しながら、船を進めなければならぬ。小さい船では、波の谷間に入った時は、前後左右海水に囲まれ水以外何も見えなくなり、そこを脱出するため海水を登るようになる。すると、エンジンに負担が大きくなる。大きくかかるため回転がぐんと落ちる。そこでエンジンを止めてしまったら大変、船はバランスを失い転覆してしまう、急いでエンジンの回転を上げてやる。次に船が波頭の上になる、今度はスクリュウが浮いてしまい負荷が軽くなるので、物凄い勢いで回転し船が壊れるのではないかとと思うほど振動する。これを繰り返しながら、なるべく波に逆らわないように船を進める。このように、天候の急変のため操業の途中に急拗引き上げることが、毎シーズン二度や三度は必ずあった。

私が父と一緒に海に行くようになったのは昭和三十年頃からで、この頃になると、東京湾の水も、かなり汚染されてきたので、海苔養殖の場所も沖へ沖へと移動していった。

養殖の場所が遠くなった事により、それまでは一人乗りのテンマ船で、「ろ」や「かい」を使い川から漕いでいったが、テンマ船では不可能ということで、エンジンの付いた親船にテンマ船を乗せて現場まで行くようになった。おかげで、ろやかいで船を漕ぐ腕前が落ちた。親船で沖の養殖場に着くと、テンマ船を下して乗り移る。しかし、漕ぐのは十メートルぐらいになった。それでも慣れるまでの私は、少し風が出ただけで、なかなか親船にたどり着けなく、私も初めの頃は、「風が出たから帰るぞ」と、父にいわれ、急いで仕事をかたづけ、親船に向かって船を漕ぐが、風にあおられ思うように船が進まず、焦れば焦るほど違う方向に船が行ってしまった。真冬というのに汗をびっしょり掻いた、一方、父はと見ると軽くすいすい漕いで、親船に着いてしまう。そして私の方を見てたまりかねてロープを投げてくれる。私はロープにつかまりやっと親船にたどり着いた。私も早く父のように船を漕ぐようにならなければと思い一生懸命努力した。

船という私は、冬、海、季節風、その中をゆつくり走る「そろそろ丸」、そして、風にあおられ流されそうなテンマ船と、若い頃の、辛く、厳しかった思い出が次々と、浮かびそして、消えていく。

特定非営利活動法人 海苔の ふるさと会会報 「大森海苔の ふるさと館 ニュース」22号

平成23年8月1日発行
編集・発行 特定非営利活動法人 海苔のふるさと会
連絡先 東京都大田区平和の森公園2番2号
TEL 03-5471-0333
FAX 03-5471-0347